KITA NO MACHI NO NEWS LETTER

キタのまちのニュースレター

No.13 2024 夏-秋号

至福のピアノ時間を楽しむ

大淀コミュニセンターで「大人のピアノ教室」を主宰する黒崎淳子先生に、「シニアにピアノを学んでいただく」ようになった眼差(まなざし)、ピアノへの情熱をお聞きしました。

50代に入った頃、〝自分は何も習い事をする機会がなかった〟とお思いの母親世代に、ピアノを弾く喜びを共有したいと強く思うようになりました。20年以上も前のことです。10名の募集に、なんと100名の応募がありました。その様子を見たとき、私の「すべてを捧げる」との思いに駆られました。

私自身がピアノに触れた最初は6歳の頃。田中美枝先生に師事しました。ご主人もバイオリンを学ぶためフランスに留学した日本最初の方で、夫婦で音楽に精通されていました。

私は美枝先生にピアノを学びました。とてもとても厳しい方でした。その先駆者としての交流は、美枝先生のもとに集う多くの音楽専門科家、大阪ゆかりの「大フィル」の音楽総監督、朝比奈隆氏ご結婚の仲人であったことなど、枚挙にいとまがありません。

ピアノを学び続け、音大に進んだ私は、美枝先生のように「街のピアノの先生」を極めたいと決心しました。卒業後、その道をまい進しました。その甲斐あって、100名ほどの教え子が音大に進むという歓びにも恵まれました。

「大人のピアノ教室」に通ってくださる皆さんには、今も「ピアノを弾ける喜びを感じてもらえたら」の純粋な心根で接しています。これは、自然と湧き上がってくる感情です。私ばかりではなく、この教室のピアノ講師、その全員が、この感情を共有しています。

「大人のピアノ教室」の合言葉は、一年後を目指しましょう！ステージで自分だけの時間がもらえる喜びは、何物にも代えがたいからです。

ピアノを習いたいという思いは、いろんな立場の方の集まりを生み、そこからコミュニティを芽生えさせます。お母さん、お父さん、お子様とご一緒、お孫さんとご一緒のおばあちゃん、おじいちゃん、……関わりのない方たちがピアノの話だけでなく、それぞれの話で盛り上がり楽しそうな交換の場を育みます。それが、「大人のピアノ教室」の魅力、心の扉も開放されるというわけです。水曜日の15分間、アナタも「さぁ、ピアノに向かってみませんか！」

この書き物は、黒崎先生に直接取材の上、紙幅に許される範囲に編集したものです。「大人のピアノ教室」詳細は、大淀コミュニティセンター（または、北区民センター）にお問い合わせください。

大人のピアノ教室

■対　　象：ピアノを弾いてみたい方、久しぶりに弾いてみたい方
■場　　所：大淀コミュニティセンター ホール
■曜　　日：水曜日（月3～4回）
■時　　間：9時45分～14時30分
　　※個人レッスンのため、空き時間にて相談
■お問合せ：大淀コミュニティセンター
　TEL 06－6372－0213 / FAX 06－6371－0107

■バックナンバーの確認→「キタのまちのニュースレター ちょっとだけプラス」で検索！

大淀＆北区民センター便り

ポケットパークと自転車置き場

北区民センターは北区役所の手前、左手にあります。この二つの建物の正面は、ポケットパークのような佇まいになっており、その北東角には絵になる時計台があり、北区の花「赤いバラ」が添えられています。

その周りは、管理が行き届いた植え込みになっており、道路・歩道に沿いつつ北側に回り込み、扇町公園に自然と誘ってくれます。

このポケットパーク、目立つことはないが楚々としており、いつも美しく、ふと「なぜなのか？」と思った。地域のボランティアの皆さんに支えられ、「手入れ」が行き届いていることは、無意識の中で意識していた。

北側から、あらためてよくよく見てみると、やはり「楚々とした美しさ」が目にとまる。なぜなんだろう？そんな時、植え込みの奥、ポケットパーク中央部にあたる自転車置き場に目が行った。その位置は、もちろん区役所と区民センター両方の「正面」ということになる。だから、それを再認識させられ、自転車置き場に目が行ったことに、ちょっとした驚きがあったし、なんとなく気恥ずかしくもあった。

……ポケットパークの楚々とした美しさは、自転車置き場の整理整頓にも関係しているんだ……

大阪メトロ、JR環状線の駅近、集客力のある商店街にも近い。さらに、キッズプラザ・放送局・扇町公園と、人を引き付ける魅力ある場所と場所。それらが折り重なるように集まる北東角のポケットパーク。

ポケットパークの存在は、すべての人が共有する「コモンとして」が建前だが、端っこの目立たない場所にありがちなポケットパークは、〝荒れた空間〟のまま、忘れ去られていることも珍しくない。ところが、ここのポケットパークは、楚々としていながら、ちゃんとした主張がある。

そのことは、この写真の、シッカリとした〝お手製のプランター〟にも感じられる。それは、自転車置き場の整理整頓をサポートするように、いつもちょこんと佇んでいる。

見慣れた風景〝まち歩き〟

水都・大阪の華

キタのまちのニュースレター 編集室

「桜の通り抜け」でなじみ深い造幣局は明治新政府の一大事業。世界標準の通貨を「一刻も早く！」と、江戸から明治時代に突入した僅か3年後、1870（明治３）年8月に完成する。

現在の建物正面は国道1号に向く北側だが、当時は、すぐ東の大川と向き合っていた。物流は大阪湾口から、建設時も完成後も舟運が生命線の造幣局だった。今でも大川に建物が正対しているように見えるのは、その名残。立派な〝正面玄関・跡〟も残されている。

造幣局に沿い、北側に「都市計画道路」が整備されるのは、やっと昭和5（1930）年。それが現在の国道1号だ。〝通り抜け〟だけではない。知る人ぞ知る入館無料の「造幣博物館」には、歴代の流通コイン・数々の記念コイン・大判小判・金貨に銀貨・世界の珍しいコインなどの〝現物〟が展示され、誕生秘話も興味深い。

館の入り口すぐに「当時の建物模型」がある。そこには、大川と構内を結ぶ港「舟入」が見てとれ、「水の都」の賑わいが目に浮かぶ。

今現在も造幣局ご近所に「川の港」がある。ちょっと前まで、この港には「定期船」が行き来した。その光景は「水都・大阪」の代表格だった。

今この川筋では、新しい美術館・博物館・水辺のホテルなど、新時代のシンボルが続々と立ち上がる。それらの光景は、水都・大阪の華……造幣局に連なっている。

キタ歩き日本旅

福島県の巻

全国約半数の道府県事務所が北区「大阪駅前ビル」に！ 旅の玄関口みたい！！ それが〝キタ歩き日本旅〟です。

全国第二位を誇る収穫量「桃の出荷」福島県HPより出典

福島県の記念コイン
（造幣局・造幣博物館にて）

極めることの美しさ

福島県猪苗代湖畔で生まれた野口英世は明治30（1897）年20歳で医師免許を取得したのち研究者として歩み、明治33（1900）年アメリカ留学。以後の業績は、まさに綺羅星のごとく。その大家が一時帰国した大正4（1915）年10月、大阪高等医学校（現・大阪大学医学部）で講演し、大阪城を観光、それから箕面も楽しんだという記録がある。

中之島の〝阪大〟から足を伸ばし、大川沿いを上がり〝天守閣再建前〟の大阪城（再建は昭和6年）で日本初の本格的洋式近代工場「造幣局」を遠望、その後、梅田駅から電車に乗り箕面に向った（のではないか）と想像すると、わが町大阪、さらに北区との親しみが湧き興味は尽きない。

その福島県の大阪事務所を訪ね驚いた。まず何より、オフィス空間が事務的ではなく自由闊達、「知ってもらうため」の情熱にあふれている。広くない空間だが、可能な限り「旬の物産」を紹介する工夫が映え、福島県の名所・名物に触れることができる。

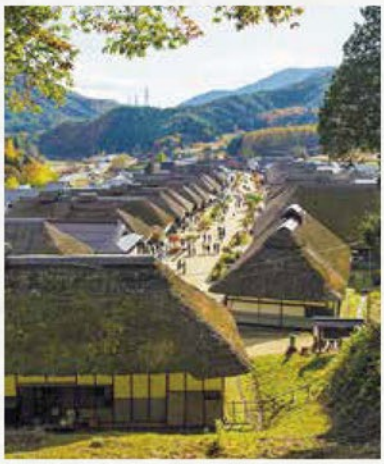
対応してくださる受け答えの一つひとつが県事務所の堅苦しさとは無縁、ホスピタリティ感にあふれている。試しに「今の旬は何ですか？」と尋ねてみた。すると、すぐさま「桃の季節です！」と、快活な答えがこだまする。

福島県は全国有数の桃の産地らしく、農業従事者の切磋琢磨で「品質・甘さに自信あり」とのことだ。試しに桃果汁100％の缶ジュースを購入、試飲した。うまい！……「現物」はいかほどの旨さなんだろう？　福島県事務所では、「現物の桃」を初秋まで「ここで販売します！」とのことだった。

美味に加え、風光明媚の魅力も忘れてはならない。福島県には、磐梯朝日・日光・尾瀬の「日本を代表する国立公園」が3つもある。さらに、会津鉄道沿線には、藁葺き屋根の家屋群が壮大なスケールで現存する歴史と文化の一大継承地「大内宿」がある。……福島県の広大無辺さは、数限りなく奥も深い。

自然・歴史・文化などのあらゆるものが、観光名目でリセットされ、集客することを基準に更新・変更が加えられる新時代だが、福島県の新スローガンは「ひとつ、ひとつ、実現する ふくしま」と、お聞きした。そこに、時間の継承を大切にした「極めることの美しさ」の響きを感じ、人の営みの強さ「未来気分のおすそ分け」もいただけた。

大阪市北区の大阪駅前第1ビル、その福島県事務所には、明解な「地域の主張」が込められている。



ふくしまの旅　観光フォトライブラリより出典
「大内宿紅葉」

福島県大阪事務所／福島県観光物産館 大阪サテライトショップ
北区梅田1-3-1-900 大阪駅駅前第1ビル9階　☎06-6343-1721（開館 平日9時～17時30分 / 土日祝・年末年始は休み）

浪花百景歳時記

″SUN″と″三羽のからす″に隠された浪華″三大橋″の謎を解け！

大阪大学総合学術博物館
研究支援推進員
波瀬山祥子

第五十二景　「三大橋」　歌川国貞画

大阪を代表する三大橋。堂々たる水都の景観ですが作品には謎があります。一つは三羽の明けがらすの意味、もう一つが大砲を先頭に難波橋を渡る軍隊の存在です。艶っぽい明けがらすと物騒な軍隊のコンビネーションに、どんな思いがこめられているのでしょうか。

道行ナビゲーター　大阪大学名誉教授　**橋爪節也**

生駒山から朝日が放射状に広がり、烏が三羽、大川の上空を悠然と飛んでいます。左から、天満橋、天神橋、難波橋のいわゆる浪華三大橋をテーマにした、浪花百景シリーズ中、最もシンボリックな一枚です。

三大橋は幕府直轄の公儀橋で、大坂を南北につなぐ大動脈として経済や交通を支え、第八景「浪花橋夕涼」（キタのまちニュースレター 第5号掲載）など、四季折々、庶民にも親しまれてきました。中之島から南東を向く構図で、画面左側には大坂城が描かれています。また、この絵の時代、中之島は難波橋とはつながらず、画面右下の緑の芦の群が実は中之島の東端でした。天満橋と天神橋の間の八軒屋浜には早朝から往来する人々の姿が、左奥には町会所などに設けられた火の見櫓がシルエットで表されています。

構図は大坂の名所案内記『浪華の賑ひ』（安政二年・一八八五刊行）などからとっていますが、朝日と烏、そして難波橋の行列は国貞のオリジナルです。中国の神話では太陽には三足烏が棲むとされ、日本でも熊野の八咫烏伝説があるように古くから太陽と烏は深い結びつきがあります。また、熊野の護符に書いた約束を破ると「熊野で三羽の烏が死に、嘘をついた本人は血を吐いて死ぬ」という伝説を踏まえ、男女のきびを描いた落語「三枚起請」は有名です。

一方、難波橋では、大砲を先頭に鉄砲足軽の部隊が行進しています。緑色の着物に赤い陣羽織の武士が続き、陣笠を被り馬に乗る者もいます。何やら穏やかならぬ光景です。大砲は、一八五五年にイギリスで開発されたアームストロング砲、あるいは一八五九年にフランスで開発された四斤山砲でしょう。「沢瀉紋」の旗がかかげられ、第二次長州征伐前夜、譜代の沼津藩五万石水野忠誠（一八三四～一八六六）の行列という説が提示されています。

色恋沙汰の物語を暗示する三羽の明けがらすと、幕末の世情を反映した幕府軍の行進。対極的な二つのモチーフを重ねたこの絵の謎をどのように解きますか？ちなみに昭和七年（一九三二）の郷土研究「上方」第13号の表紙では、「三大橋」の烏の構図をそのままにして、川岸を道頓堀の芝居町に変えてしゃれたパロディを演出しています。

猛暑まっただなかの今号にギラギラした日の出は暑苦しいかもしれませんが、秋には「浪花百景タペストリー展」（11月2～4日）とそれに関連した街歩きイベントも予定しておりますので、涼しくなったころ、皆様とお会いできることを楽しみにしております。

編集後記

今回の取材で「一芸と人生」ということに強く心を惹かれました。私自身は、勿論そんなこととは無縁ですが。一芸に寄り添った人生……「なんて素晴らしいんだろう！」と。なにより「一芸に真摯に向き合う」ことこそが、人を生き生きとさせ〝生涯これ現役〟へと誘ってくれる。取材させていただいているあいだ、ずっとそのことが羨ましくって、羨ましくって。凡人かくあるべし、遅すぎることはない。私も音楽に向き合ってみようっと!!

■編集・発行：北区民センター・大淀コミュニティセンター・都市コミュニティ研究室
■指定管理者：一般財団法人大阪市コミュニティ協会
■発　行　月：7月・10月・1月・4月の各月下旬発行

北区民センター　〒530-8401 大阪市北区扇町2-1-27
✉ kitakumin-center@abelia.ocn.ne.jp
大淀コミュニティセンター　〒531-0074 大阪市北区本庄東3-8-2
✉ oyodo-comini@abelia.ocn.ne.jp